

障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究

田引俊和

Research on Participation Motive of Volunteers

Who Support Sports for the People with Disabilities

Toshikazu TABIKI

本研究では障害者のスポーツ活動を支えるボランティアの、活動への参加動機に着目して分析をおこなう。

障害者スポーツボランティア活動について、調査票による量的調査および分析から、その参加動機に関する7つの因子が抽出され、同時にこれら参加動機の因子とボランティア活動経験との間には一定の関係があることが確認できた。ボランティア活動経験のない群は活動経験が長い群に比べて「社会貢献」動機が高く、活動経験の長い群ではボランティア経験のない群に比べ「スポーツ」動機の値が高い傾向にあることが示されている。

今後研究を継続していく上では、障害者スポーツボランティアへの参加動機を測定・分析する際に用いる質問項目、及び尺度の妥当性を検討する必要がある。

Keywords : 障害者スポーツ、ボランティア、動機

Sports for the People with Disabilities, Volunteer, Motivations

I. はじめに

1. 研究背景

近年、ボランティア活動に対する関心が高まっており、多くの人たちが身近な、そして関心のある分野でのボランティア活動に参加している（経済企画庁：2000、全社協：2006）。「ボランティア元年」と称された1995年の阪神・淡路大震災では延べ100万人を越える人がボランティアとして様々な形で被災地を支援する活動を行なったとされている。これに前後して、1991年の市町村社会福祉協議会が実施する「ふれあいのまちづくり事業」、1998年の「特定非営利活動促進法（NPO法）」、2000年の「社会福祉法」施行などにより、それまで任意団体等で自主的な活動を行っていた状態から具体的な制度上の基盤を持つことになり、地域住民のボランティア活動への参加を推進する動きが整えられてきた（経済企画庁：2000）。また、国連では2001年を「ボランティア国際年」と定め、ボランティア活動への理解、参加が促進される環境整備、ネットワークの拡大、活動の推進という目的を掲げるとともにボランティア活動への期待を示している（全社協・全国ボランティア活動振興センター：2001）。この他、平成14年までの障害者プランにおいても、第6の項目で「心のバリアを取り除くために」を掲げ、ボランティア活動を通じた障害及び障害者についての理解を深めることを目指すものとなっていた。加えて、学校教育の場においても、平成13年の学校教育法改正によりボランティア活動等への活動促進が示されている他、高等学校では、ボランティア活動などへの参加により単位認定されるようになっている（総理府：1996年、内閣府：2006年）。

全国社会福祉協議会・全国ボランティア活動振興センターの報告(2006)によると、実際にボランティア活動に参加する人は増加傾向にあり、活動の形態としては個人で参加するよりも何らかの団体(組織)に所属しながらボランティア活動に参加している人が多くをしめている。また、活動分野については、障害のある人たちや高齢者への福祉サービス提供に関連したボランティア活動や(桜井:2007)、まちづくりに関連した活動に参加する人たちの割合が比較的高いことが示され(全社協:2002、山内:2004)、背景には様々な動機や関心があることも伺える。

ところで、ボランティア活動への参加や関心の高まりを受けて、近年ではボランティアコーディネーター、あるいはボランティアマネジメントといった考え方も示されてきている。1980年代の「福祉のまちづくりボランティア事業」や1993年の「第1次ボランティア活動推進7ヵ年プラン」から今日まで、全国でボランティアセンターの設置とともにボランティアコーディネーターの配置もすすめられ、その数も増加してきている(全国社会福祉協議会・全国ボランティア活動振興センター:2006)。ボランティアコーディネーター(ボランティアコーディネーター)やボランティアマネジメントといった考え方は本質的にはどちらもボランティアに参加する多くの人たちやボランティア団体・組織、あるいは要支援者に何らかの働きかけを行うものだと考えられる。例えば、全社協(1999、2000)ではボランティアコーディネーターについて、側面的な支援を行うものとしつつも、ボランティアが十分な力を発揮するために相談、広報、啓発活動、ボランティア教育、活動先の開発、グループ・組織の支援を行なう専門職だとしている。また地主(2003)では、要支援者とボランティアとの相互行為の円滑化と多様な課題の解決のためにコーディネーションによる介入の必要性に触れている。同様に、ボランティアマネジメントについては、望まれる結果を得るために組織の資源を最大限に効果的に使い、ボランティア及びボランティアプログラムが効果的に活かされる運営にする(筒井:1998)、マネジメントを行い明確な組織目標を打ち出し、それを構成員に共有させ、やる気を促す仕組み、モチベーションをつくることも重要(田尾他:2004)、とその役割と機能に触れている。実際に、前述の阪神・淡路大震災では参加した大勢のボランティアと被災現場の双方のニーズに対応したボランティアコーディネーターによる活動が展開されその役割が理解されている(川口他:2005)。

2. 研究目的とこれまでの知見

これら背景を鑑み、本研究ではボランティア活動をより意義のあるものとするためにボランティアマネジメントやコーディネーターを構成する要因の一つであるボランティア活動への参加動機に着目し分析を行う。具体的には、同一組織において継続的にボランティア活動に参加している人を対象に、参加への動機の特徴と活動経験(期間)との関係を明らかにし、今後ボランティアコーディネーターやボランティアマネジメントに貢献できる検討材料の一つを得ることを目的とする。

これまでもボランティアの参加動機に関する研究は数多く行なわれており、すでに利他的、利己的といった大まかな分類に整理されているがこの他に Fitch (1987) は「社会的義務」という3つ目の動機の分類を示している。併せて桜井(2002)でも、ボランティア活動への参加動機について「利他的動機」「利己的動機」に加えて「複数動機」といった3群を示し、3つ目の複数動機アプローチによるボランティアの動機分析が近年の潮流だとしている。同時に桜井(2002)は、複数動機アプローチに関する研究として Clary (1998) らの VFI (volunteer functions inventory) モデルの6つのボランティア参加動機を挙げつつ、それまでの国内の動機分析について10の類型に整理している。具体的には、VFI モデルでは「Enhancement」「Career」「Social」「Values」「Protective」「Understanding」といった6つの動機が示され、さらに国内研究については「利他心」「自己成長」「社会適応」「技術習得・発揮」「防衛」「レクリエーション」「利得・損失計算」「規範的参加」「理念の実現」「テーマや対象への共感」といった動機概念にまとめられている。

一方で、ボランティア活動への参加動機と活動経験との関係についてもいくつかの報告がされている。谷田（2001）は、組織に所属して対人的な援助活動を行なう大学生のボランティアについて、ボランティア活動への参加の動機と継続の動機を学年別に分析し、継続促進につながる結果を示している他、Winniford（1991）も、ボランティアサークルの同一対象者に、参加の動機と継続活動の動機の調査を行ない動機の変容に関する分析をまとめている。さらに川元（2000）では、ボランティア活動に対する意欲について、活動直後に加え一定期間をおいた前後にも着目し肯定的に変容する要因分析を行なっている。また、青山ら（2000）は、老人福祉施設での介護ボランティアを対象に、活動動機と活動経験の関係について調査を行っており、活動歴が長いほど「自発的動機」が高いことを示し、それに則した支援の必要性を示している。桜井（2002、2005）では「複数動機アプローチ」分析として、性別や年齢、職業といった個人属性の他に、過去の活動歴や活動頻度といった要因を含めた研究を行い、ボランティア活動への参加動機を多角的に分析している他、継続の要因と年齢階層との関係についても調べている。

本研究では、これらボランティア活動への参加動機に関する分析や、活動経験による動機の変容といった先行研究を視野に入れつつ、特にボランティアの担う部分が多いとされる（松尾：2002）スポーツ領域でのボランティアに焦点を当て分析を行なう。スポーツ分野で活動するボランティアについては、「スポーツボランティア」とも称され、明確な定義は確認できないがSSF（2006）によると「報酬を目的としないで自分の労力、技術、時間を提供して、地域社会や個人、団体のスポーツ推進のために行なう活動を意味する」とされている。これまでのスポーツボランティアに関する研究では参加動機に関する研究で松岡ら（2002）がスポーツボランティアの活動動機の先行研究を分類した上で、ケーススタディを用いて動機を構成する8つの要素を示し、また、松本（1999、2004）では障害者のスポーツイベントに参加したスポーツボランティアを対象にその動機を因子分析し8つの参加動機因子に加え、個人的属性との関係についても明らかにしている。

これらをふまえ、本研究では障害者スポーツに関するボランティア活動の参加動機と活動経験（期間）との関係に焦点を当て分析を試みる。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査対象

本研究では、障害者スポーツの分野においてボランティア活動への参加動機の特徴と活動経験（期間）による意識の変容の関係を把握するために、調査票を用いて量的な意識調査を行なう。ボランティア活動への参加動機と活動経験との関係に着目して分析を行なう本研究においては、特に、継続的で、かつ、多数のスポーツボランティアが関わっている障害者スポーツ組織を選定し調査対象とした。具体的には、知的障害者に対するスポーツ活動を日常的、継続的に支援している「スペシャルオリンピックス」組織を対象とし、2006年11月に、知的障害者のスポーツ大会である「第4回スペシャルオリンピックス日本・夏季ナショナルゲーム・熊本」に参加したボランティアを対象とした。調査対象は、全国から知的障害のある選手（アスリート）を大会に引率した各都道府県選手団のコーチボランティア（以下、コーチボランティア）と、熊本県内各所で大会の運営全体を支援した現地のボランティア（以下、大会ボランティア）の2群で構成されている。コーチボランティアについては全数である560人に、また、大会ボランティアについてはほぼ全数にあたる1000人に同内容の無記名調査票を、大会期間中に大会実行委員会を通じて配布し、郵送法により回収した。回収期間は、大会終了直後から11月24日までで、最終的に得られた回答は373（回収率23.9%）であった。

回答者の基本的属性は表1に示したとおりである。性別は男性が197人（52.8%）、女性が139人（37.3%）であった。また、これまでのスペシャルオリンピックス（以下、SO）でのボランティア活動経験につ

いては、「活動経験なし」が 93 人 (24.9%)、活動経験初期にあたる「1 年未満」が 35 人 (9.4%)、活動経験「1 年～4 年」が 139 人 (37.3%)、「4 年以上」が 106 人 (28.4%) であった。なお、表には示していないが回答者の職業は、会社員 134 人 (35.9%)、団体職員 18 人 (4.8%)、公務員 32 人 (8.6%)、自営業 28 人 (7.5%)、主婦 19 人 (5.1%)、学生 26 人 (7.0%)、アルバイト 25 人 (6.7%)、無職 30 人 (8.0%)、その他 25 人 (6.7%) であった。

表 1 回答者の基本属性

(n=373)

項目	カテゴリー	度数 ^①	%
性別	男性 (平均 46.5 歳)	197	52.8
	女性 (平均 41.3 歳)	139	37.3
ボランティア活動頻度	していない	28	7.5
	年に数回程度	64	17.2
	月に 1～2 回	81	21.7
	週に 1 回程度	109	29.2
	週に 2～3 回	42	11.3
	ほとんど毎日	13	3.5
SO ^② でのボランティア活動経験	経験なし	93	24.9
	始めたばかり～1 年	35	9.4
	1 年～4 年	139	37.3
	4 年以上	106	28.4

注 1：欠損値があるため合計人数が異なる。

注 2：SO=スペシャルオリンピックス

なお、本研究で述べる障害者スポーツ活動とは、前述の通り今回調査を行なった知的障害者にスポーツ活動を支援している「スペシャルオリンピックス」組織での活動を対象とする。また、ボランティアにおいては本来、自発的な行動ではあるものの、教育活動中でのボランティア参加や、企業などでの組織単位での参加といったものもあり、近年その活動の形態も様々になっている（田尾他：2004）他、全国社会福祉協議会ボランティア活動振興センターと総務省では、その調査において「ボランティア」の捉え方に違いがみられることも示されている（桜井：2007）。さらに、本研究と関係のあるスポーツボランティアへの参加動機についても、これまでにいくつかの活動へのきっかけが報告されている（松岡他：2002）（松本：1999、2004）が、ここでのボランティアとは参加の形態に関わらず、調査対象とした障害者スポーツ大会に「ボランティア」という形で携わった全てのスタッフをボランティアとして扱うものとする。

2. 調査票項目

障害者スポーツの活動に参加するボランティアの参加の動機を測定するためには適切な測定項目と尺度を用いる必要があるが、障害者スポーツボランティアへの参加動機に関する尺度は確認できていない。そのため本研究では、これまでの先行研究（Cnaan and Goldberg-Glen：1991, Clary：1998, 松岡他：2002, 松本：1999、2004）を参考にしながら一部質問語句を変更して用い、同時に、本研究で対象とする知的障害者のスポーツ活動に関係のある項目を新たに加え、最終的に 30 の質問項目を作成した。それぞれ、「非常にあてはまる（5 点）」「まああてはまる（4 点）」「どちらともいえない（3 点）」「あまりあてはまらない（2 点）」「まったくあてはまらない（1 点）」の 5 段階尺度を用いて得点を与えて分析を試みた。

この他、これまでのボランティア活動経験の有無、あるいは活動経験期間といった質問項目に加え、年齢、性別、職業といった個人的属性項目に関する質問を設定した。

3. 分析方法

はじめ障害者スポーツを支えるボランティアの、活動に対する動機の特徴を把握するため今回設定したボランティア活動への参加動機に関する質問群の因子分析を行なった（因子負荷量 0.40 以上）。その上で抽出された各因子ごとに下位尺度得点を算出し、ボランティア活動経験の有無、および活動期間との関係性について多重比較を用いた分析を行なった。

Ⅲ. 結果

1. スポーツボランティアへの参加動機

障害者のスポーツ活動を支えるボランティアに参加する人たちの動機の把握を試みた。障害者スポーツボランティアへの参加動機に関する 30 項目について、Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は 0.851 であった。また、Bartlett の球面性検定では ($p < .01$) で有意性が確認できたため、設定した 30 項目については因子分析を行っても適当だと判断した。

障害者スポーツボランティアへの参加動機に関する質問項目の因子分析においては、固有値スクリープロットから 7 因子が妥当だと判断し、主成分分析（バリマックス法）を行った。その際、十分な因子負荷量を示さなかった 1 項目を除外し再度主成分分析（バリマックス法）により因子解を求めた（表 2）。7 因子の累積寄与率は 62.648% であった。

抽出した 7 つの因子について、第 1 因子は 6 つ質問項目で構成され、「他の人の役に立ちたいから」「活動を通して社会の役に立ちたいから」「プログラム運営に役立ちたいから」という利他的な側面を表わす項目が抽出されたため「社会貢献」因子と命名した。第 2 因子は、「スポーツに関心があるから」「スポーツ活動を支援したいから」「プログラムに興味があるから」などスポーツに関する項目が高い負荷量を示していたため「スポーツ」因子とした。第 3 因子では、「新しい知識や経験を得たいから」「多くの人と出会いたいから」「社会的な視野を広げたいから」「自分自身が成長したいから」といった自分自身の成長を表わす内容であることから「自己成長」因子と命名した。第 4 因子については、「ストレス解消になるから」「気分転換になるから」「余暇時間を有効に活用したいから」など利他的でも利己的でもなく、単にボランティア活動に参加したと考えられる項目であるため「個人的興味」因子とした。第 5 因子は、「参加者（アスリート）に関心があるから」「参加者（アスリート）と交流することができるから」「参加者（アスリート）の活動を支援したいから」といった参加者（アスリート）への関心を示す項目であることから「参加者支援」因子とした。以下、「何らかの報酬を得たいから」「記念品などがもらえるから」といった項目を含む「報酬」因子が第 6 因子として、また、第 7 因子には「SO（主催組織）側から依頼されたから」「知人や友人に強く頼まれたから」という内容で構成される「依頼」因子が確認できた。

スポーツボランティアの動機に関する分類では、前述の松岡ら（2002）が、社交、学習・経験、個人的興味、キャリア、自己陶冶、組織的義務、社会的義務、スポーツといった 8 つをその要素だと示している。同様に松本（2004）が障害者スポーツボランティアの参加動機について行なった因子分析の結果では、自己実現、選手支援、スポーツ、奉仕、プログラム支援、報酬、気晴らし、依頼といった 8 つの因子が抽出されたことが示されている。それぞれ質問項目や分析方法は違うものの、スポーツボランティアの動機として抽出された要素、因子は本研究で確認できた因子と概ね似通ったものであり、ここでの因子分析結果は妥当なものだと判断できる。

表2 障害者スポーツボランティアへの参加動機の因子分析結果

質問項目	I	II	III	IV	V	VI	VII
因子Ⅰ：社会貢献							
他の人の役に立ちたいから	0.821	0.027	0.068	0.027	0.023	0.053	-0.007
活動を通して社会の役に立ちたいから	0.804	-0.023	0.063	-0.026	0.037	0.014	0.008
ボランティア活動に興味があるから	0.702	0.160	0.201	0.118	0.079	-0.045	-0.082
プログラム運営に役立ちたいから	0.615	0.255	0.163	0.036	0.132	0.005	-0.080
大会を盛り上げたいから	0.558	0.097	0.373	-0.077	0.139	0.200	-0.098
ボランティアの必要性を他の人に理解してもらいたいから	0.458	0.243	0.222	0.119	0.184	0.034	0.151
因子Ⅱ：スポーツ							
自分の知識や経験を生かしたいから	0.130	0.774	0.051	-0.001	0.032	0.066	0.082
スポーツに関心があるから	0.028	0.768	0.158	0.177	0.151	-0.046	-0.011
スポーツ活動を支援したいから	0.186	0.718	0.125	0.141	0.242	0.006	-0.089
身につく技術や技能が得られるから	0.203	0.570	0.267	0.047	0.099	0.250	0.080
プログラムに興味があるから	0.008	0.515	0.333	0.214	0.298	0.008	0.061
因子Ⅲ：自己成長							
新しい知識や経験を得たいから	0.180	0.273	0.805	-0.015	0.014	0.108	-0.123
多くの人と出会いたいから	0.160	0.077	0.795	0.135	0.229	0.075	-0.078
社会的な視野を広げたいから	0.358	0.154	0.726	0.080	0.014	-0.019	-0.029
自分自身が成長したいから	0.167	0.267	0.606	0.261	0.102	0.089	-0.124
因子Ⅳ：個人的興味							
ストレス解消になるから	-0.043	0.054	0.047	0.861	0.083	0.125	0.080
気分転換になるから	0.017	0.113	0.137	0.857	0.046	0.201	0.035
余暇時間を有効に活用したいから	0.162	0.414	0.159	0.580	0.010	0.077	0.058
活動を通して自分を表現できるから	0.141	0.432	0.130	0.453	0.192	0.300	-0.060
因子Ⅴ：参加者支援							
参加者（アスリート）に関心があるから	0.075	0.166	0.128	0.170	0.775	0.126	-0.027
障害者に関心があるから	0.282	0.280	0.031	-0.064	0.639	0.096	-0.001
参加者（アスリート）と交流することができるから	0.139	0.051	0.515	0.122	0.593	-0.196	0.014
参加者（アスリート）の活動を支援したいから	0.432	0.151	0.269	-0.085	0.550	-0.148	0.070
会社や学校、地域団体で参加することになったから	0.213	-0.196	0.118	-0.147	-0.413	0.295	0.254
因子Ⅵ：報酬							
何らかの報酬を得たいから	0.004	0.095	0.007	-0.005	0.022	0.805	-0.055
記念品などがもらえるから	-0.025	0.080	0.068	0.240	0.033	0.701	0.155
他の人から認められたいから	0.097	0.015	0.055	0.294	-0.080	0.689	0.162
因子Ⅶ：依頼							
SO側から依頼されたから	-0.070	0.057	-0.029	0.132	-0.004	0.057	0.859
知人や友人に強く頼まれたから	-0.030	0.022	-0.220	-0.004	-0.029	0.138	0.789

累積寄与率 62.648%

2. ボランティア活動に関する因子と活動経験との関係

続いて、抽出された障害者スポーツボランティアの動機因子7つと、ボランティア活動経験の関係性についての検討を行った。動機の特徴については概して、ボランティア経験なしの群と長期間ボランティア経験のある群との間において有意な差が確認できた。

因子についてはこれまで抽出された各因子群について、高い負荷量を示した項目の平均値を下位尺度得点として算出し分析に用いた。一方のボランティア活動の経験については本研究の調査を行ったスペシャルオリンピックス活動（以下SO）へのボランティア参加経験年数を対象とした。今回の調査でボランティア活動期間の平均値が4.08年であったためこれをもとにSOボランティア活動経験を、①これまで全くSOボランティアに参加したことがない群、②活動初期にあたる活動経験1年未満の群、③1年から4年の群、④活動期間4年以上の群、の4群に分け一元配置分散分析および有意確立5%水準のTukey HSD法による多重比較を用いて分析を行った。

分散分析の結果第1因子の「社会貢献」（ $F(3, 332) = 4.08, p < .05$ ）、第2因子の「スポーツ」（ $F(3, 333) = 7.31, p < .01$ ）、第4因子の「個人的興味」（ $F(3, 338) = 6.71, p < .01$ ）において有意な結果が得られた。

また、多重比較では動機因子の「社会貢献」について、SOボランティア経験なしの群と経験1-4年の群とで有意差が見られ、SOボランティア経験のない群の方が「社会貢献」の傾向が高いことが確認できた。同様に動機因子「スポーツ」においては、ボランティア経験なしの群と、活動経験期間1年から4年の群、及び4年以上の群との間で有意差があり、経験なしの群よりも活動経験が長い群の方が「スポーツ」について高い値を示していた。さらに「個人的興味」因子については、SOボランティア経験なしの群よりも、活動経験1-4年の群、及び4年以上の群が高い傾向にあることが確認できた（図1, 2, 3）。

IV. 考察とまとめ

1. 障害者スポーツボランティアへの参加動機の特徴とボランティア活動経験との関係

本研究では、はじめ障害者スポーツボランティアに参加する動機の特徴を把握するために因子分析を行なった。その結果、30の質問項目から「社会貢献」「スポーツ」「自己成長」「個人的興味」「参加者支援」「報酬」「依頼」という7つの動機因子が抽出された。それぞれ、先行研究（松岡他：2002、松本：1999、2004）のボランティア参加動機と似通ったものとなっており、本研究で確認された7つの因子は障害者スポーツボランティアの参加動機の特徴を捉えていると考えられる。

さらに抽出された各因子とボランティア活動経験との関係性を確認した結果、「社会貢献」「スポーツ」

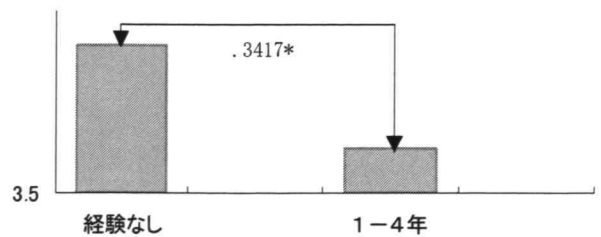


図1 「社会貢献」因子と活動経験の多重比較結果

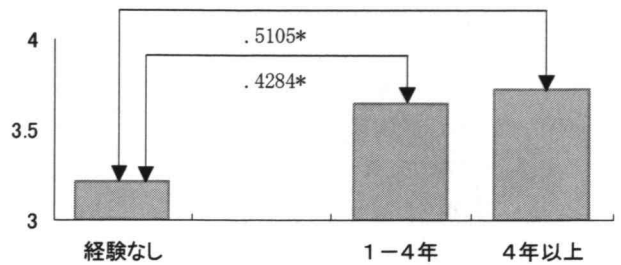


図2 「スポーツ」因子と活動経験の多重比較結果

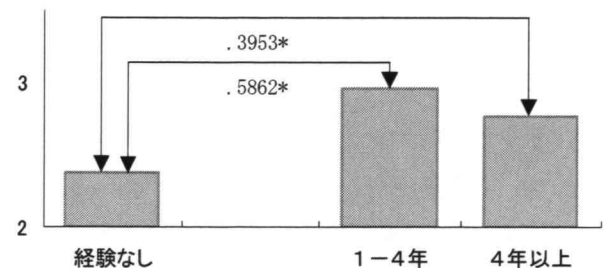


図3 「個人的興味」因子と活動経験の多重比較結果

「個人的興味」といった動機因子において活動経験による有意な差が確認できた。「社会貢献」因子についてはボランティア経験がない群が、活動経験 1-4 年の群に比べて高い値を示しており、ボランティア活動に参加する上で大きな動機分類の一つである利他的な動機を表わしていると考えられる。また、「スポーツ」因子においては、ボランティア活動経験なしの群よりも、1-4 年、および 4 年以上の群が高い値であることが確認できた。同様に、「個人的興味」因子でもボランティア活動経験なしの群よりも、1-4 年、および 4 年以上の群が高く有意な関係にあることが明らかとなった。これらを合わせて考えると、障害者スポーツボランティア活動への参加の動機は当初、社会への貢献といった利他的な動機であったものが、活動期間が長くなるにつれてスポーツ活動を意識したものへとその意識が変容していることが伺える。諏訪（2002）はボランティア・市民活動について、活動者にとって活動することそのものの大切さ、活動する人の楽しさや喜びといった点に触れている他、松岡ら（2002）は、スポーツボランティアの動機について、仕事を積み重ねるにつれて動機の変化があるとしている。本研究の結果からも長期間の活動者からは社会貢献というよりも自分自身のスポーツの楽しみという動機傾向が確認できており、障害者スポーツボランティアに参加する人を開拓、募集する場合と、すでに活動に参加している人に対する活動継続へのアプローチの場合では、その視点、及び実際に提供する活動内容に何らかの違った視点、取り組みが必要になると考えられる。特に、本研究で扱った障害者スポーツボランティアという領域においては、例えば参加者の開拓、あるいは募集において地域の社会福祉協議会やボランティアセンターの活用に加えて、一般のスポーツジムやスポーツクラブでのボランティア募集や広報活動が有効になることも推察される。

2. まとめと今後の課題

障害者スポーツボランティアへの参加の動機について、本研究では因子分析を用いてその特徴を抽出し、さらに動機の特徴と活動経験との関係についても分析を行なってきた。その結果、スポーツボランティア活動への参加動機と活動経験には一定の関係があることが確認できたが、ここでの結果を一般化する上での限界と今後の課題に触れておく。

まず、本研究の結果から長期間のボランティア活動とスポーツ動機因子の関係が確認できたが、一方で活動参加に際して社会貢献や障害者への支援といったことを意識してきた人たちが、スポーツ場面、あるいはスポーツ動機をもった他のボランティア参加者たちの影響を受けたために淘汰されてしまったことも考えられる。その結果、当初の活動動機は満たされずにボランティア組織を退会、あるいは活動を停止してしまい回答を得られなかった人たちの存在は否定できない。同時にこの点に関しては、今回用いた調査票では分析項目を設けていないために十分な検討が行なえなかった。関連して、ボランティア募集に際してはその組織や活動がボランティアへ与える魅力は何であるかをアピールすべき（桜井：2002）だとしている他、仲澤（2002）は国内関連スポーツ団体への調査からスポーツボランティアの課題の一つとして、「スポーツ組織の使命のボランティアへの広報」という課題を挙げている。今回調査を行なった障害者スポーツ組織に参加したボランティアについては参加に際して、あるいは長期間の活動継続においてどのような情報をどの程度知り得たことが関係しているのかは調査票では質問していないためこの点確認できない。

また、本研究で作成したスポーツボランティアへの動機に関する質問票では、回答者の中に例えば、職業的、あるいは専門的にスポーツに関係するものの存在や、これまでのスポーツ経験や成績、他のスポーツクラブ、スポーツチームへの所属の有無についても確認しておらず、これらのことが、今回の調査結果に影響を与えたことは否定できない。今後はこれらの要因、及び適切な質問項目と尺度を用いることを視野にいれつつ研究をすすめていく必要がある。

注

- 1) 知的障害者のスポーツ活動を支援しているスペシャルオリンピックスでは、この組織内でスポーツ活動に参加する知的障害者を「アスリート」と呼んでいる。

文献

- 青山美智代、西川正之、秋山学、中迫勝(2000)「老人福祉施設における介護ボランティア活動の継続要因に関する研究」『大阪教育大学紀要』48(2)、p343-358.
- Clary,GilE.;Snyder,Mark;Ridge,RobertD.;Copeland,John;Stukas,ArthurA.;Haugen,Julie and Miene,Peter,(1998), Understanding and Assessing the Motivations of Volunteers:A Functional Approach,*Journal of Personality and Social Psychology*,Vol74,No.6,p1516-1530.
- Cnaan,Ram A.and Goldberg-Glen,Robin S.(1991).Measuring motivation to volunteer in human services,*Journal of Applied Behavioral Sciences*,vol27,no3,p269-284.
- Fitch,R.T.(1987):Characteristics and Motivations of College Students Volunteering for Community Service,*Journal of College Students Personnel*,28(5),p424-431.
- 地主明広(2003)「ボランティアコーディネーション実践の妥当性—ボランティア活動の行為論的理解から」『地域福祉研究』31、p66-77.
- 川口清史、田尾雅夫、新川達郎編(2005)『よくわかる NPO・ボランティア』ミネルヴァ書房.
- 川元克秀(2000)「福祉教育・ボランティア学習活動参加後の学習者のボランティア活動意欲の変容」『社会福祉学』41(1)、p121-134.
- 経済企画庁編(2000)『国民生活白書(平成12年版)』大蔵省印刷局.
- 谷田勇人(2001)「福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析」『社会福祉学』41(2)、p83-93.
- 松本耕二;北村尚浩;國本明德;仲野隆士(2004)「スポーツ・ボランティアの参加動機、組織コミットメントと継続意欲—地域の障害者スポーツ団体を支えるボランティア」『山口県体育学研究』p13-22.
- 松本耕二(1999)「スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究(障害者スポーツイベントのボランティアに着目して)」『山口県立大学社会福祉学部紀要』第5号、p11-19.
- 内閣府編(2006)『障害者白書平成18年版』東京コロニー.
- 松岡宏高、小笠原悦子(2002)『非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機』*体育の科学*、52(2)、p277-284.
- 松尾哲矢(2002)「スポーツボランティアとその専門性」『*体育の科学*』52(4)、p270-276.
- 仲澤眞(2002)「スポーツ・ボランティア活用の現状と課題」『*体育の科学*』52(4)、p266-269.
- 桜井政成(2007)『ボランティアマネジメント』ミネルヴァ書房.
- 桜井政成(2005)「ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異」『*The Nonprofit Review*』5(2)、p103-113.
- 桜井政成(2002)「複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析」『*The Nonprofit Review*』2(2)、p111-122.
- 野村一路(2002)「障害者スポーツにおけるボランティア」『*体育の科学*』52(4)、p299-303.
- 総理府編(1996)『障害者白書平成8年版』大蔵省印刷局.
- SSF 笹川スポーツ財団(2006)『スポーツライフデータ(スポーツライフに関する調査報告書)』SSF 笹川スポーツ財団.
- 諏訪徹(2002)「地域福祉とボランティア・市民活動」『地域福祉研究』30、p38-49.
- 田尾雅夫、川野祐二(2004)『ボランティア・NPOの組織論』学陽書房.
- 筒井のり子(1998)『施設ボランティアコーディネーター』大阪ボランティア協会.

Winniford, J.C. (1991). *An Analysis of the Motivations and Traits of College Students Involved in Service Organizations*, Doctorial Dissertation, Texas A&M University, College Station, TX.

山内直人編(2004)『日本の寄付とボランティア』大阪大学大学院国際公共政策研究科 NPO 研究情報センター.

全国ボランティア活動振興センター編(2002)『全国ボランティア活動者実態調査』全国社会福祉協議会.

全国社会福祉協議会・全国ボランティア活動振興センター編(2006)『ボランティア活動年報』全国社会福祉協議会・全国ボランティア活動振興センター.

全国社会福祉協議会・全国ボランティア活動振興センター編(2001)『ボランティアみんな知ってる?』

全国社会福祉協議会・全国ボランティア活動振興センター.

全国社会福祉協議会・全国ボランティア活動振興センターボランティアコーディネーター研修プログラム教材開発研究委員会編(2000)『ボランティアグループ支援の基礎知識』全国社会福祉協議会.

全国社会福祉協議会・全国ボランティア活動振興センターボランティアコーディネーター研修プログラム教材開発研究委員会編(1999)『相談活動の基礎知識』全国社会福祉協議会.